

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：32617

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580158

研究課題名(和文) 戦争・観光・デザイン 戦前期満洲における「観光デザイン」の歴史的展開

研究課題名(英文) War, Tourism and Design: A Historical Development of Tourism Design in Pre-war Manchuria

研究代表者

高 媛 (KO, EN)

駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・准教授

研究者番号：20453566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前期満洲地域における観光ポスターやパンフレット、リーフレット、旅行雑誌及び書籍の表紙や挿絵、絵葉書などの観光宣伝印刷物を手がかりに、観光デザインの歴史的変遷を交えながら、観光宣伝の実態を解明したものである。

1920年代頃から南満洲鉄道は内地客の観光誘致に乗り出し、囑託画家・眞山孝治を中心に、宣伝印刷物の図案や観光絵画の制作に取り組んだ。そして満洲国建国(1932年)前後から、満洲最大の民俗行事である娘々祭の祭神「娘々」と、武力を背景としない仁愛徳治を提唱する満洲国の国是「王道」を組合せたデザインのピラやポスターを大量に作成し、建国精神の浸透と宣撫工作に活用していった。

研究成果の概要(英文)： This research examines the actual conditions of tourism propaganda in pre-war Manchuria and the historical development of tourism design by analyzing posters, pamphlets, leaflets, the covers and illustrations of tourism magazines and books, postcards and other tourism materials.

The South Manchuria Railway Company began promoting tourism to attract Japanese visitors from the 1920s, with increasing use of pamphlets and paintings mainly designed by commissioned painter, Koji MAYAMA. From around the time of the foundation of Manchukuo in 1932, a large number of propaganda leaflets and posters combining designs of "Niang Niang" (the Chinese goddess of the quintessential Manchurian folk event, the "Niang Niang Festival"), and the words of one of the idealistic slogans of Manchukuo, "Odo" (virtuous ruler without military forces) were printed, which were thought to be effective in spreading a unifying spirit among the people of Manchukuo and pacifying the Chinese.

研究分野：歴史社会学

キーワード：満洲 観光 戦争 宣伝 美術 ポスター ピラ デザイン

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦前、満洲地域においては南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」）やジャパン・ツーリスト・ビューロー（以下「JTB」）などの在満観光機関の推進のもとで、膨大な観光宣伝印刷物が作成されていた。チャイナドレスの女性に「招く鮮満」と大きく書いた文字を組み合わせたポスターや、異国情緒豊かな哈爾濱のパンフレットは、満洲への旅行に憧れを抱かせ、満鉄の「あじあ号」の絵葉書は、最先端の技術の象徴として認識され、これらの観光宣伝印刷物が、内地人の満洲イメージの形成に大きく寄与していた。本研究はこのような観光宣伝印刷物が、いかなる意図のもとで制作され、どのような満洲イメージを作り上げ、さらに、具体的にどのように満洲宣伝に活用されていたかに注目するものである。

本研究の学術的背景には、三つの流れがある。第一の流れは、満洲の社会文化史研究である。近年、満洲研究は政治、軍事、経済面だけでなく、社会や文化に重心を置いた研究が増えつつある。先行研究には、貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア』（吉川弘文館、2010年）などが挙げられる。

第二の流れは、満洲宣伝史の研究である。先行研究としては、満鉄弘報課に関する西原和海（「満洲における弘報メディア 満鉄弘報課と『満洲グラフ』のことなど」『國文學：解釈と教材の研究』51(5)、學燈社、2006年5月）や、白戸健一郎（「中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説 満鉄弘報課の活動を中心に」『京大大学生涯教育学・図書館情報学研究』9、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、2010年3月）の論述などが挙げられる。ただし、これらの議論では満鉄の観光活動は、満洲国時代（1932～1945年）に重きが置かれているため、満洲事変（1931年）前までの観光宣伝に関しては手薄となっている。

第三の流れは、東アジア美術史研究である。先行研究には、日中戦争中、中国の伝統的な「年画」が視覚的プロパガンダとして利用された経緯を明らかにした川瀬千春『戦争と年画』（梓出版社、2000年）の研究などが挙げられる。なお、満洲の美術史に関しては、日本人画家と満洲との関わりや満洲美術展覧会を取り上げた江川佳秀の一連の研究がある（「日本美術の後背地 日本人美術家にとっての『満洲』」村重寧先生星山晋也先生古稀記念論文集編集委員会編『日本美術史の杜 村重寧先生星山晋也先生古稀記念論文集』竹林舎、2008年；「満洲国美術展覧会をめぐる」東京文化財研究所企画情報部編『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』中央公論美術出版、2009年）。

本研究は上記三つの流れをふまえ、観光宣伝印刷物を手がかりに、政治宣伝における観光宣伝の位置づけを明確にした上、満洲観光宣伝の具体的な実施過程と満洲社会に与えた影響などについて考察する。

2. 研究の目的

本研究は、満洲時代に発行された膨大な観光宣伝物を手がかりに、日露戦争から第二次世界大戦終結までに満洲地域で行われた観光宣伝の実態を解明することを目的とする。具体的には、満洲国建国（1932年）を境とする満鉄主導時代（1906～1931年）と満洲国時代（1932～1945年）という二つの時代を、日本人観光客向けと中国人観光客向けの観光宣伝に分けて捉え、いわゆる4つの事象における、観光宣伝の手法の特徴や観光宣伝物の役割を明らかにすることを試みた。特に満鉄主導時代の日本人観光客を対象とした観光宣伝は、研究そのものが少ないと感じていたため、非常にやりがいを感じた。なお、満洲国時代の日本人観光客を対象とした観光宣伝は、以前私自身が研究していたことがある

ため、今回の研究では割愛した。

まず、これまでの満洲史研究で比較的手薄だった、満鉄主導時代の日本人を対象とした観光宣伝の実態に焦点を当てることを目的とした。同時に、1921年から1931年にかけて満鉄の嘱託画家であった眞山孝治の活動を中心に、満鉄の観光宣伝の特徴と実態について検証を行うこととした。満鉄が本格的に内地客向けの観光客誘致に乗り出したのは、1907年の開業から10数年が経過した1920年代頃であった。それまでは、満鉄は主として鉄道網やホテル網などの観光インフラ整備に力を入れていた。1917年、満鉄は朝鮮鉄道の委託経営を引き受けたことをきっかけとして、翌1918年7月には東京支社に無料相談機関「鮮満案内所」を新設し、積極的に内地客向けの観光誘致に乗り出していく。観光宣伝物への需要が高まるなか、1921年、満鉄は内地から画家・眞山孝治を招き、彼を中心に宣伝印刷物の図案や観光絵画の制作に取り組んだ。この時代、満鉄はどのような方法で観光客を増やそうとしたのか、その際に使用した観光宣伝印刷物はどのようなものがあり、どんな意図をもって作成されたのか。また、満洲そのものの印象を向上させるために、文化人を満洲旅行に招待していたが、誰を招待したのか、どのようにもてなしたのか、その招待旅行は帰国後の文化人に何を期待していたのかなどを考察した。

次に、中国人向けの観光宣伝として、満洲最大の民俗行事「娘々祭」を題材に、観光政策の持つ政治的意義や中国人社会に与えたさまざまな影響、娘々祭そのものの歴史的変遷などを、満洲国建国前と建国後に分けて考察することを目的とした。娘々祭は日露戦争以前から満洲の老若男女が自発的に参集する経済的、社会的機能を具備した盛大な年中行事である。満洲全土に散在している娘々廟の数は270~280ヵ所と推定され、毎年参詣者は延べ250~260万人を下らないといわ

れており、有意義な研究対象であると考えた。満洲国建国以前の時期、満鉄は沿線にある大石橋娘々祭と鳳凰城娘々祭の期間中、割引乗車券や仮停車場、臨時列車などの優遇策を打ち出し、もっぱら旅客吸収や産業振興の側面から娘々祭の旅行を奨励してきた。ところが、満洲国建国前後から、娘々祭での宣伝方法が変化を見せ始め、宣伝内容においても宣撫工作の比重が高まるようになった。どのように宣撫工作が行われたのか、その際に使用したビラやポスターはどのような内容であったのか、宣撫工作は果たして上手く機能したのかなどを考察した。

3. 研究の方法

それぞれの論文について研究の方法を述べる。

「眞山孝治」の論文における、1920年代の満鉄の観光宣伝については、1922年10月に創刊された満鉄初の旅行雑誌『平原』や、鮮満案内所の会議資料、満鉄に招待された文化人が著述した満洲紀行文及び、満鉄発行のポスター、パンフレット、絵葉書といった観光資料などを手がかりに、満鉄嘱託画家のさきがけである眞山孝治という人物に焦点を当て、観光画家の領域を遥かに超えた彼の多彩な活動内容を通して、内地客向けに行われた満鉄のさまざまな観光誘致の取り組みを明らかにした。

「娘々祭」の論文における、中国人向けの「娘々祭」の観光宣伝については、満洲時代に発行された日本語・中国語の文献、新聞・雑誌記事や、日中双方の公文書などを用いて考察を行った。資料を収集した代表的な場所として、日本国内では国会図書館本館や東洋文庫、及び拓殖大学などであり、中華人民共和国内では、遼寧省档案馆、吉林省档案馆及び中国国家図書館などである。具体的な資料としては、『満洲日日新聞』『大連新聞』『新京日報』、満蒙文化協会の機関誌『満蒙』、日

本語大衆雑誌『月刊満洲』、漢字新聞『盛京時報』、「奉天省公署」の档案などである。また上記に加え、娘々祭で撒布されたピラやポスターなども手がかりとして、旅行奨励、産業振興から、民衆宣撫に至るまでのさまざまな日本の思惑を明らかにするとともに、娘々祭における日中間の接触・浸透・攻防といった相互のダイナミズムを描いた。

4. 研究成果

それぞれの論文について研究成果を述べる。

「眞山孝治」の論文においては、満鉄初の囑託画家として、1921年から10年間に亘り観光宣伝に関わった眞山孝治の活動を通り、1920年代における満鉄の観光宣伝の実態と特徴を明らかにした。まず、眞山の作品目録の整理については、『満洲芸術壇の人々』（西孟利『満洲芸術壇の人々』曠陽社出版部、1929年）や、『満洲日日新聞』、『大連新聞』、『平原』などの史料に基づき、眞山が満洲を去る1931年までに制作していた観光ポスターやパンフレット、リーフレット、旅行雑誌及び書籍の表紙や挿絵、絵葉書などの観光宣伝印刷物計39点の作品一覧を作成した。眞山は宣伝印刷物の作成と観光絵画の執筆に力を注ぐ傍ら、満鉄旅客課主催の満蒙宣伝隊での観光絵画展への同行、旅客課発行の旅行雑誌『平原』への絵画と文章の寄稿及び満鉄弘報系の主導による文化人の満洲旅行の斡旋・案内など、いくつもの大役を果たした。満洲観光史に残した眞山の活動の軌跡からは、加速化・多角化していく1920年代の満鉄の観光宣伝の特徴を読み取ることができる。研究の成果は論文「一九二〇年代における満鉄の観光宣伝 囑託画家・眞山孝治の活動を中心に」として発表した。

「娘々祭」の論文においては、満洲最大の民俗行事「娘々祭」の歴史の変遷に焦点を当て、日本主導の観光政策が現地社会に与えた

影響を検討した。満鉄は、1908年春から娘々祭参拝客向けに割引乗車券を発売し、祭の振興と発展を図った。1928年からは娘々祭の余興に豚や苗木の「彩票入り花火」を導入し、畜産植林や産業開発の普及宣伝に力を入れた。さらに、1929と1930年に、邦人商業団体に補助金を下付し、娘々祭への出店を積極的に助成した。この時期の満鉄は、娘々祭に多大な資金を投入しており、産業振興の宣伝に大きな期待を寄せるようになっていく。一方、満洲国建国前後から、中国人の信仰的である女神「娘々」と、武力を背景としない仁愛徳治を提唱する満洲国の国是「王道」との組合せで描かれたピラやポスターを大量に作成し始め、娘々祭を建国精神の浸透と宣撫工作に活用するようになっていった。建国直後の1932年5月、リットン調査団の満洲訪問に合わせ、満洲地域内の9ヵ所で娘々祭が敢行された。治安が回復されていないなかでの娘々祭の敢行は、秩序の回復と民心の安定を内外向けにアピールし、娘々祭は「王道楽土」を象徴する行事として、政治的意味が付与されることになった。その後、協和会主導のもとで、娘々祭の運営体制は組織化と官営化が進行し、祭典での宣伝内容も国策を色濃く反映するようになった。他方、大衆娯楽としての中国式見世物は「祭典気分」を高揚させ、国家宣伝を成功に導く機能を持つということで、意図的に保存・奨励されることになった。研究の成果は論文「観光・民俗・権力 近代満洲における『娘々祭』の変容」として発表した。

今回の研究においては、題材を絞ることで、観光宣伝の実態を解明することを試みた。今後は、今回の研究を土台として、戦前期満洲における観光を、歴史社会学の視点からより深く考察していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 高 媛、「観光・民俗・権力 近代満洲における『娘々祭』の変容」、『旅の文化研究所研究報告』、旅の文化研究所、査読有、第 25 号、2015、pp.75-91

(2) 高 媛、「一九二〇年代における満鉄の観光宣伝 嘱託画家・眞山孝治の活動を中心に」、『Journal of Global Media Studies』、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、査読無、第 17・18 合併号、2016、pp.171-184

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

高 媛 (KO EN)

駒澤大学・グローバル・メディア・スタ
ディーズ学部・准教授

研究者番号： 20453566